

# SCM現場研修2024 感想文集



- 日時：①<2024年>2月26日（月）午後 1 時半～4 時半、ZOOM}
- ②2月28日（水）午後 1 時半～4 時半、ZOOM
- ③3月1日（金）午前10時 JR 新今宮駅西口改札集合、現地研修～3月2日（土）

## ●スケジュール

- ①■ 2月26日（月）<釜ヶ崎>司会・石村愛子  
委員長あいさつ／オリエンテーション／研修生自己紹介  
講演①生田武志「夜回りと生活困窮の現場から」  
講演②大谷隆夫「釜ヶ崎のセンター問題について」  
質疑応答／意見交換
- ②■ 2月28日（水）<生野>司会・津村樹理  
講演③吳光現「在日コリアンの基本的人権」  
講演④長崎由美子「朝鮮学校差別から見えるもの」  
質疑応答／意見交換
- ③■ 3月1日（金）  
午前10時 JR 新今宮駅西口改札集合、釜ヶ崎フィールドワーク、各自昼食ののち、午後1時半、大阪地下鉄メトロ南巽駅集合、大阪朝鮮初級学校見学、見学ののち南巽駅から鶴橋駅へ移動。生野フィールドワーク、KCC 会館でまとめの会&キムチチゲパ

ーティ、KCC 宿泊。

④■ 3月2日（土）

午前中、KCC で生田さん、長崎さん、現場研修スタッフを囲んで反省会。

## <参加者>

1. 成田悠紗
2. 茶谷百華
3. 光嶋唯留
4. 酒井花菜
5. 梅田花帆
6. 宅間稜悟
7. 坂地みずき
8. 末永光
9. 東里穂
10. 辻淵豪士
11. 木下鈴菜
12. 北山直生
13. 吉岡祐理
14. 狩野将慶

## SCM協力委員会委員長より

●「現場は自分みずから発見するまでは虚構である。…」

SCM 協力委員会委員長

鈴木一弘(学生 YMCA)

第46回 SCM 現場研修が、2019年(第41回)以来、新型コロナ禍を経て、5年ぶりに宿泊を伴う形態(2020年:中止、2021、2022:ズームのみで実施、2023年:日帰り現場フィールドワーク)で実施されました。参加された研修生の皆さん、講義・現場の引率をされた講師の方々、準備をされた実行委員会メンバーに心から感謝申し上げます。

表題の言葉は、1983年11月開催のSCM協議会における発題で語られたれものです。その言葉は「・・・現場は自分を見出し、自分が作り変えられ、生かされ、人間になり、クリスチャンになる。」と続いています。

SCMとは、学生キリスト者運動(Student Christian Movement)の略であり、1979年から始まりました。実施日数、宿泊日数、実施形態は変化をしながらも、生野と釜ヶ崎の現場に足を運び入れ、固定・拡大する貧富の差、そして差別が存在する社会構造に目を向け、貧しきものの立場に立とうとする姿勢は変わりなく、引き継がれてきたと思います。

2回に渡るズームによる事前研修、そして当日のフィールドワークとその夜から翌日にかけての振り返りと共有の時間。いつも思うのが、この研修を通じて「豊かな学びと交流の時」を経験できたのは私達スタッフの側であり、それをデザインしてくれたのは、研修生の皆さんのこの研修に向き合う姿勢と気持ちによるものだと思います。各々の研修生の積極的な意見表明や質問が、講師の方々の話や応答に生命の息吹を与え、より深い「気づき」と共有の場が生まれていく、それが学

校の授業＝「受講」とは異なる、この研修の良さだと思います。

以下、参加者の皆さんの感想・意見を共有する中で、「更なる気づきとその深まりの連鎖」が、私たち(実行委員、講師、研修生)の中で起こり、次回へと引き継がれていくことを願ってやみません。

末尾になりますが、多くの若者・学生が「現場」に触れ、新たな自分を見出し、変わり、生かされる機会のために、募金・寄付していただいた諸氏及び諸団体の皆様に、厚く御礼を申し上げます。

## 研修生の感想文

●学外での学び 実際の現場で感じたこと

立命館大学 成田悠紗

私はこの研修を通して「正しい理解」というものの重要性を強く感じた。まず釜ヶ崎の面で、私は今まで親に、ホームレスの人にはあまり近づいちゃダメだよと言われてきたため、正直あまりよくない目でホームレスの人たちを見てしまっていた。しかしそれはその背景について何も知らないまま持っていた勝手な考えであったことに気づかされた。野宿している人たちにもそうならざるを得なかった背景や過程があることを知り、それに対して適切な対処がされていない現状にもどかしさを感じた。また、生活保護に関しても、借金があると受けられないとか年齢制限があるとか1度受けたらもう受けられないといった誤解や噂から生活保護を断る人がいるという話を聞き、生活保護に対する正しい理解が必要で、そのうえで生活保護を受けるのか野宿をするのか判断してもらいたいと思った。私がこの研修に参加するまで持っていた偏見も、世間の人々の野宿者や生活保護者への否定的な視線も、すべては「知らないから」起きているのだ。こうして実際に現場に行って話を聞き、肌で感じることで「どうにかしなければ

ならない」と感じた。正しい理解から解決へ向かっていくと思うため、伝えることと理解しようとする双方の歩み寄りの努力が必要だと考えた。

次に、在日朝鮮人の面でも、「知ること」の重要性に気づかされた。最近、KPOP や韓流ドラマ、ファッションやメイクといった文化がトレンドになっている一方で、在日問題に対する認識が深まっておらず、ギャップがあることに対して違和感を持った。しかし、ポップカルチャーなどをきっかけに、その華やかな部分だけでなく、歴史などにも視点を当てる入り口にできるとよいと思った。実際に朝鮮学校を訪れてみて、子どもたちの生き生きとした姿がとても印象に残った。自分らしくいられる環境の大切さとそれを守っていくためにどうしたらよいか考える機会になった。

両方に共通して言えるのが、「知らないこと」が差別や偏見を生むということだ。共に生きていくためには、小さな声に耳を傾け、それぞれを認め合うことだと考えた。まず知らなければ考えることにつながらない。報道にできることがあると強く感じた。

また、同じく参加した学生たちと意見交換をする時間が多くあったのが、私にとって大変意義のあることであった。自分と真反対の意見を持つ子もいて驚くとともに、たしかにそういう意見もあるなどか、その観点から見ればその考え方もできるなどといった自分一人では見ることができなかった広げられた視点で考えることができたからだ。意見を言いやすい暖かい雰囲気でおいしいご飯を食べられたのも仲が深まるよい時間となった。初めて大学の外に出て学ぶことを体験したが、実際に社会の現場に出てみなければ得られない学びとそのおもしろさを知った。これをきっかけにどんどん学外の学びにも触れていきたい。

## ●SCM 研修 感想

立命館大学産業社会学部 茶谷 百華

私は、近年新聞やニュース等を読むことによって社会問題に対して興味を抱いていたものの、実際に社会問題に触れて学んでみるということを経験したことがなかった。それではいけないと思いこの SCM 研修に参加する事を決めたが、今回の研修によって、新たな知識、価値観を深く蓄えることが出来たのではないかと考える。

まず実際に現場の研修に訪れる前に行ったオンラインでの研修は、現場の知識を蓄えておくためにも非常に必要不可欠な講義であったと考える。何の知識もなく現場に出向くのと、知識を持った上で現場に出向くのでは問題に対する意識が全く違うと感じる。そのため、オンラインを用いて、釜ヶ崎の現状や在日コリアンの人権等について深く知ることが出来たことは非常に良い機会であったと感じる。

また、私は元々大学で人間福祉専攻という分野のもとで学んでいるため、貧困問題や釜ヶ崎について触れる機会が多くあった。しかしながら、実際に現場を訪れてみると想像よりも遥かに衝撃的な景色が広がっていて凄く驚いた。特に一番衝撃を受けた点はゴミを綺麗にすると逆に増える可能性があるため、あえて撤去しないという話だ。街には多くのゴミが充満していた。私はゴミを全部撤去してしまった方が、より住みやすいまちづくりになるのではないかと考えていた。そのため、ゴミを綺麗にすることで反動で増える可能性があることは考えもしなかったため、非常に驚きを感じた。

また、生野の街に行った際にも衝撃を受けた点がある。私は朝鮮学校に行くことが初めてだったため非常に楽しみにしていた。実際に訪れてみると長崎さんがおっしゃっていたように、マスコミで報道されているような反日教育といった風潮はなく、皆非常にフレンドリーで、自分が知っている情報とは違い衝撃を受けた。

改めて、授業だけでは知らなかった現状について様々な視点から詳しく学ぶことが出来て、純粋

に楽しかった。また、現場研修が終了した際には皆でフィードバックを行うことによって、自分では気づかなかった部分に他の人が気づいていたり、新たな発見を見つけることができ、非常に良い経験になった。

そして、私は今まで相手に対して質問することに対して凄く苦手意識を持っていた。しかしながら、今回せっかく学びに来たのだから疑問に思っていることは積極的に聞こうと思い、質問をすることが出来た。これも SCM 研修では、質疑応答が多く研修者に寄り添った取り組みがなされていたからだと感じた。

まさに百聞は一見にしかずという言葉があるように実際に自分の目で見て確認した方が確かであるため、今回この SCM 研修に参加したことは自分にとって非常に貴重な経験になったとともに有意義な時間となった。

今回はこのような場を用意していただき本当にありがとうございました。

## ●SCM 研修感想文

### 立命館大学メディア社会専攻 光嶋唯留

SCM 研修を志望した理由は、未知の世界に向き合い、改めて生きることを考える機会にしたかったからだ。今の自分の環境の有り難さを感じられる大変良い経験となった。

WEB でのお話や意見交換から、在日朝鮮人の街・生野と、労働者の街・釜ヶ崎を詳しく知った。冒頭、生田さんのお話は「路上死問題」。寒さや暑さに耐えながらの路上生活者を、無関係者が罵り、最悪火をつける。惨い。明日の仕事や食物は確保できず。病気でも薬や病院のお金がなく死を待つのみ。この環境でも人の根幹である「生きる事」をひたすら選択している。時間の使い方など枝葉の小さな事で日々悩む自分の弱さを実感した。

新今宮駅が関空から近い好立地ゆえ、ホテル

が多くアベノハルカスも見える。本当に「釜ヶ崎に野宿者がいるのか」と当初疑問だった。だが少し狭い道に入ると大量に積み上った冷蔵庫等ゴミの山。おじちゃん達が集まる三角公園もあった。仲間たちと笑顔でワイワイお酒や賭け事を楽しんでいる。意外だった。暗い雰囲気や想像していたが、人間性や活気が溢れていた。お金がなくても心の持ちようで何とかなるのだ。自分で工夫し日々モチベーションを見出している。この地帯の人は空き缶集めで生活していると伺った。1000個集めても 2000 円。7~8 時間要す。低賃金の重労働だ。日雇労働も従前より少なくなっている。建設関係が多く体力が必要だ。一方、夜回りをしていないからか野宿者が少ないようにも見えた。大阪府は日雇い労働者・野宿者の街、釜ヶ崎を無くす方向なのか。生活保護者認定の要件を変更し早く野宿者を減らしていけば、皆が幸せになると安易に考えていた。だが、おじちゃんや街の雰囲気を見て、住む人自身が幸せを感じる場所になれば良いという考えが変わった。価値観は千差万別で、お金や仕事があるから幸せとは限らないからだ。メディアや国は「危ない」「汚い」のマイナス面の議論中心ではなく、個々の前向きな心境にも踏み込んで考慮した上、優しい目をもって見守る方向に改善して欲しい。

大阪朝鮮初級学校は想像していた教育方法と全然違った。私は、SCM 研修の一週間前に韓国へ旅行したところだった。すこしハングル語が分かるため、教科書や掲示物のみで微笑ましくなった。朝鮮学校は、日本の学校と同様の教科や取組みがなされている。挨拶も元気で笑顔いっぱいだ。韓国語と日本語、英語を学ぶ教育課程に参加したいと思った。反面、補助金がなく、プールや給食、体育館がないことに驚いた。将来差別を受けるかもしれない、外見・日本語水準は同じなのになぜ教育環境が不安定な朝鮮学校に通うのだろうか？質問した。答えは、文化に誇りを持っている、朝鮮学校の方が安心だから等、一人一人に明確な理由

があった。皆共通してあえて朝鮮学校へ行く選択をしているように感じた。両親の祖国への思いも伝わった。子どもの笑顔は実際、見て感じるができる。祖国への誇り、笑顔は万国共通。日本の学校、朝鮮学校と線引きすること自体が間違っている。

百聞は一見に如かず。今回研修に参加して、報道とは違う現場の実情が分かった。釜ヶ崎でも朝鮮学校でも差別は決してしてはいけない。メディアや多数派の意見で動くのではなく、少数派だが現場の生の意見を聞き、優しく見守る。人は平等だ。人に良し悪しの価値観や線引きをせず、各々にとって住みやすい場所が作れるようになっていけば嬉しい。

### ●SCM 現場研修感想・百聞は一見にしかず 酒井花菜

SCM 現場研修を振り返ると、「百聞は一見にしかず」ということを実感する研修だった強く感じる。大学という場で学んでいるだけでは頭で考え知識を蓄えるだけで終わってしまうことが多い。そのため今回の研修を通して、今まで自分のなかで生まれなかった理解を育むきっかけを得る経験が出来たと思う。

正直研修に参加するまでは、考えても理解出来ない、どうしてだろうと感じることが多かった。釜ヶ崎で生活する人はなぜ生活保護という制度がありながらも日雇い労働や野宿という選択をするのか。日本社会で生きて行くにもかかわらずなぜ敢えて朝鮮学校に通う選択をするのか。自分の想像力を働かせてもなお、そういった選択への理解は芽生えなかった。だが SCM 現場研修に参加し、当事者が生活する町に足を運び、身近な方々からの声を直接聞くことでその考え方は大きく変化した。生活保護という支援がなくとも成立する自活の在り方。朝鮮学校という自分自身のアイデンティティを尊重できる場で教育を受けることの必要

性。現場研修で得た気づきや学びのどれもが、初めて知ることばかりだった。その分、今まで自分の中で生まれなかった理解を育むきっかけとなった。そして、理解出来ない、どうしてだろうと感じていたことは、私が今まで過ごしてきた環境や自分の価値基準といった狭い視野でしか物事を見られていなかったからなのだと再認識することが出来た。釜ヶ崎で暮らす人、朝鮮学校に通うという選択をする人。様々な生き方や様々な正しさがあり、そのどれもが間違っているわけではなく尊重されるべきことなのだと強く思った。今回の研修に参加し得た気づきが、現場でしか分からないこと、体感出来ないことは本当にたくさんあるのだと教えてくれた。

今回の経験は私に多くの気づきを与えてくれた。そして同時に、政治や行政の決定がどれほど大きな影響を及ぼすのか学ぶことが出来た。釜ヶ崎のセンター取り壊しにかんする話や朝鮮学校の補助金の話など、政治や行政の決定がいかいに力を発揮するのか初めて知った。政治や行政の話は、自分には遠い話であり身近に感じられなかったが、関係ないと思わずにしっかり関心を持つとうと思わされた。

自分自身のなかで、理解出来ない、関係ない、と感じて知ろうとせずに終わってしまった事柄は多くあると思う。SCM 現場研修で学んだことを心に留め、今一度自分自身と向き合いたい。そして、可能な限り現場に足を運び、知り、理解できるよう努めたいと思った。

### ●衝撃と困惑 梅田花帆

初日の ZOOM での研修には、あいにくの体調不良で参加出来ず、出遅れてしまった。自己紹介などの最初の交流に出来なかったため、2 日目の ZOOM に入るのは少し緊張もあったが、入ってみると想像以上に優しい空間で安心してお話に集

中することが出来た。

宿泊研修は、新今宮駅に 10:00 に集合ということで、起床時間も早く、全員揃って歩き出す頃は正直まだ眠気が残っていた。しかし、釜ヶ崎のセンター付近に到着すると、眠気など無くなるほどの衝撃があった。見たこともない量のゴミや大きな家電・家具が山積みされているのである。生まれも育ちも京都の私は、比較的綺麗な街しか知らずに生きてきた。缶やタバコといった少しのゴミが気になるようなそんな街だ。1日目の ZOOM に参加せずに釜ヶ崎に来たため、他の人以上に衝撃が大きかったと思う。そして三角公園には見たこともない量の、同じ背格好の年配男性が、攻撃的な張り紙やお酒を片手に賭けをしている姿を目の当たりにして、少し身体が強ばった。途中「みんな可愛いね」と声をかけてくれる男性がいたが、私たちはどのように反応したらいいか分からず受け流してしまう場面があった。しかし、帰宅してから 1日目の ZOOM 録画をいただき視聴していると「親が子に、野宿者と目を合わせるな、関わるなと教える」「もはや野宿者は野生動物と同じ扱い」という内容のお話があったことを知り、はっとさせられた。声をかけてくれた男性は、家の近所に住むおじいさんなどと何も変わらず、住む場所や生き方が異なるだけで根本は何も違わないのに、対応に困ってしまったのである。野宿者というだけで、何か危害を加えられた訳でもないのに、無意識に危険視してしまう自分の方がよっぽど恐ろしいと感じた。今回実際に釜ヶ崎に足を運び、野宿者の人の生活を間近で見たことで、自分が親になった時に子供にできる教育の厚み、そして社会人になった時にできる思考の幅が増していればいいと思う。そのために、この体験を周囲の人に伝え、自分自身も忘れないようにしたい。

午後からお邪魔した朝鮮初級学校では、素直で元気なかわいい子供たちに会うことが出来た。2日目の ZOOM を振り返ると、在日コリアンの呉光現さんが昔の体験を振り返って「今でも怖い」

とお話されていたことを思い出した。きっとここにいる子供たちも、今まで私たちが経験したことのないような理不尽な扱いや嫌な言葉を受けてきただろうに、どこから来た誰かも分からない日本人である私たちを嫌な顔ひとつせず、明るい挨拶で迎え入れてくれた。なんて素敵なお子さんなのだろうと感動すると共に、この笑顔を守るために自分には何が出来るのか分からず困惑もした。ZOOM で現状を学んだ時とは比べ物にならないくらい、実際に見た時の、心に訴えかけて来るものは多かった。大学ではメディア学を専攻し、情報を人々に伝達することを中心に学んでいるが、いくら文字と写真に想いを込めて伝えても、実際に目で見てもらわないと伝わらないことは多いのだと、この研修で思い知った。ただ報道するだけでは現状の半分も伝わっていないのだと実感できたこの経験を、今後のメディア学習に活かしていきたい。

貴重な経験と考える機会を与えてくださり、ありがとうございました。

## ●SCM 研修感想文 宅間稜悟

私が SCM 研修に参加したきっかけはゼミでの紹介だった。朝鮮学校や釜ヶ崎にはじめから興味があったわけではなかった。朝鮮学校の存在は知っていたし、その周囲に存在する偏見や厳しい現状についてもある程度は認識していた。釜ヶ崎という地域は知らなかったものの、西成区といえぱなんとなくその想像はついたし、非正規雇用・日雇い労働という単語との結びつきも理解ができた。しかしそれぞれ実際に目にしたことはないし、その詳しい実情を知っているわけでもなかった。おそらくこのような機会でもない限り、そういう環境に飛び込むことはないだろうと思い今回参加した。

まず参加して思ったことは、文字や写真を見て

知った気になっていたが何もわかっていなかったのだということだ。それは特に釜ヶ崎を見て回った時に感じた。新今宮駅から外に出るといきなり目の前にはセンターがあり、その周囲にはゴミや段ボールが山積み、そして日雇のためのトラックも止まっている。稚拙な感想だが、自分はドラマや映画でも見ているのか、そのような感覚に陥った。事前の研修でセンターの現状や釜ヶ崎の野宿生活者の実態は聞いていたのだが、その時に想像する世界などそれまで自分が見てきた世界を越えることはできないのだと、自分の想像など所詮は自分の中に既に存在しているものしか及ばないのだと感じさせられた。

次に感じたのは、これもやはり実際に触れることによる実感なのだが、さまざまな事象が世間で議論されているのだが、その中心にあるのは我々同様人間なのだという。これは朝鮮学校に行った時に特に感じた。朝鮮学校、というより朝鮮人をめぐっての差別や偏見というのは長きにわたって存在し、実際私もインターネット等でそういった意見を目にしたことは多々ある。それは双方の歴史観の問題であったり、そもそもの文化の違いであったりと多くの原因が存在しているため、全てを根絶するのは難しいのかもしれない。しかし、長崎さんのお話の中で印象に残っているのが、朝鮮学校に助成金をとるという意見に対し「日本人の税金をなぜ朝鮮のために使うのか」という反対意見が出るが朝鮮学校に通う子供たちの親は日本に同じように税金を納めている、ということである。私はこうした朝鮮学校をめぐる問題を議論する時、「日本」と「朝鮮」と言う抽象的な対立構造を思い描いていた。しかし、両者は決して完全な対立構造ではないのだ。とても近い存在であり、多くの部分は共通しているのだ。そして何よりそこに通う子供たちを見てみると、自分達がかつて通っていた小学校となんら変わらない雰囲気、無邪気に楽しんでいる様子で、とても彼らが差別や偏見問題の対象になっているとは思えない。なぜ

朝鮮学校と聞いて浮かんでくるのは子供たちの笑顔でなく、歴史観や文化の方なのであろうか。問題はもっと単純で、学びたいと思う子供たちが居て、彼らのために資金を投じるべきか否か、ただそれだけなのだ。

私は今回の研修を通して自分の知り得なかった世界を見ることができた。その一方で、遠くを見すぎて、近くにあるものが見えていなかったことにも気がついた。

## ●SCM 現場研修を終えて

### 横浜 YMCA 坂地みずき

SCM 現場研修での経験は一言で言うと”百聞は一見に如かず”だった。路上生活者や生活保護受給者、在日韓国人などの人たちは私にとって今まで見ようとしていなかった他者であり、2 日間のオンライン講義と 1 日のフィールドワークでは今までより一歩近づいたにすぎないかもしれないが、実際にそこで生きる人々を見て、現場で活動されている方と実際に話したり質問したりすることを通して、境界線を引いていたのは自分だったと思った。

まず釜ヶ崎での研修とフィールドワークについて、私が勤務している横浜中央 YMCA にはすぐ近くに寿町という、かつて日雇い労働者の街と言われた地域があり、そこでのフィールドワークや炊き出しに参加した経験がある。寿町は狭い地域にドヤと呼ばれる簡易宿泊所が密集している地域で、確かに近隣の他のエリアとはまとっている空気が異なる。関西に住んだことがない私にとって釜ヶ崎はどのような場所なのだろうと思っていたが、寿町とはまた雰囲気が違う場所であった。まず街自体の規模が大きい。駅前には星野リゾートの都市型ホテルが新しく建設され、かつての簡易宿泊所が外国人観光客向けのホテルに変貌を遂げ街の改革が感じられる一方で、センターの周辺には路上生活者の居住エリアがあり、炊き出し等が

行われる公園には街の人々が談笑していた。関内で見かける路上生活者は段ボールで寝床を作っているものの、もっと小スペースでひっそりしているのも、釜ヶ崎の段ボールハウスの大きさ、家具や雑貨などの個性、プラカードなどを使っての社会的主張はとても目新しく感じられ、社会性が違っていた。

生野の朝鮮学校見学では、まず子どもたちの人懐っこさに驚いた。朝鮮学校といっても通っている子ども達は日本生まれ日本育ちで、彼らは大阪弁のネイティブであり韓国語は朝鮮学校に入って学ぶそうだが、高学年のクラスでは長い文章を韓国語で堂々と朗読していた。朝鮮学校は正式な学校としてまだ認められておらず、多くの補助金の対象外とされ、財政的には非常に苦しい現実だそう。それでも、自分の民族的なアイデンティティを認め、自尊感情を育てるために朝鮮学校に通わせる親がたくさんいることに、民族と文化、言語の尊さを感じた。近年ではヘイトスピーチ解消法が慣行されたそうだが、子どもたちは今でも心無い暴言や差別にさらされている。それでも見学に来た私たちに「안녕하세요！」と明るく迎えてくれることに心が揺らされた。

研修を終えて思うことは、「こういう機会がなければ一生来なかったかもしれない」ということだ。一人で歩いても何も分からなかったし、踏み込めなかった。このような機会をいただいて、講師の方々や他の研修生の方々と話して、自分のマイノリティに対する見方の歪みや偏りに気づくことができた。運営チームの皆様、講師の皆様に深く感謝し、横浜での活動に繋がっていきたいと思う。ありがとうございました。

## ●見えない現実、知らない世界

立命館大学産業社会学部現代社会学科メディア社会専攻 2 回生 末永光

1 月下旬、渋谷スクランブルスクエア前を訪れ

た際に沢山の空き缶と共に道に座っている人を目にした。地元である広島市内でも何度か同じような人を見たことがある。大学で社会学を学ぶうちに社会問題に対して興味を持つようになったからなのか、今までとは違った考えをするようになっていた。誰かに教えられたわけではないが、学校という守られた組織の中で生きてきた自分は「自分と違う人」に対して見てはいけない、関わってはいけない対象だと思い込んでいた。大学での学びや、日々の生活の中で多様な人と関わるようになったことを通じて、偏見が少なくなってきたと感じている。多様な人との関わりは、自身の考えを広げてくれる。今回参加させて頂いた SCM 現場研修では、実際に現場に行くこと、自分の五感で感じることを、そして他の参加者と意見交換をすることで新たな考えや気づきを抱くこと、これからの課題を見つけることができた。

上述したように、1 月に東京で野宿者を見た際、なぜ彼らは渋谷という、人目に付く場所にいるのか、空き缶を集める生活を強いられている背景にはどのような要因があるのか考えていた。その要因は個人的なものであるかもしれないが、職を失った人に対する行政の政策が行き届いていないのではないかと考えていた。SCM 現場研修の中で、この考え方はズレていたと実感した。東京を訪れた際の考え方には「働いてお金を得て、家で生活する」ことがみんなの幸せだと思い込んでいたからだ。野宿者の中にはアパートで生活をするようになり、壁に穴を開けてしまうほど集団生活が苦手であったり、自分で釜ヶ崎を選んで移動し、生活拠点にしていたりする人がいる事実を知ったからだ。人それぞれの幸せのかたち、生き方があるにも関わらず、自分とは違う人だと勝手に一括りにしていた自分に気づいた。自分とは違う人に対しての偏見は少なくなっていると思っているが、まだまだ自分軸でしか測れないこともある。研修中のお話の中でもあったように、これまでの人生の中で多様な人と関わる機会が少なかったため、



自分とは違う人に対して過剰に反応してしまう人が多い。

「実際に現場に行き、自分の目で見る」。このことは情報社会で様々な情報や人の意見が氾濫しているからこそ、一層必要なことだと感じた。最近韓国のポップカルチャーに興味を持ったこともあり、鶴橋のコリアンタウンに行ってみたく思っていた。それは単に韓国文化を味わいたいという趣味の領域であった。朝鮮学校を訪問した後、コリアンタウンまで徒歩で移動したが、コリアンタウンはそれまでの道のりとはガラッと変わった雰囲気、観光名所として繁栄している様子であった。最も強く覚えているのは、挑戦学校とコリアンタウンは徒歩圏内にあるにも関わらず、我々は華やかな文化を享受している一方、社会問題から目を逸らしている、または社会問題が見えなくなっている現実だ。

今回の SCM 現場研修で得た気づきは、野宿者や在日朝鮮人に限った話として留めず、社会で生きる多様な人と接する際にも必要な知見だと思う。社会から見えなくなっている問題に対して学生の立場から焦点を当てて考えていきたい。今回の参加者がそれぞれの気づきから現場で多くのことを学んだように、この先も SCM 現場研修で一人でも多くの参加者が社会に対する新たな視線を得る、そんな機会であったらと思う。

## ●SCM 現場研修を終えて

東里穂

今回の SCM 研修を通して、「百聞は一見に如かず」ということを改めて深く実感することになった。事前学習で野宿者や在日朝鮮人の方々が直面する問題についての理解を深めたうえで、実際に現場に出てフィールドワークを行い、自らの目で見たり話を聞いたりしたということが非常に大きかったと感じる。

フィールドワークの 1 日目は集合時間より少し

早く到着したため、折角なので通天閣まで散歩をした。駅から通天閣への道中、スーツケースを持った外国人観光客を多く目にしたことを覚えている。しかしその一方で、フィールドワークで少し歩くと、シェルターの前には大量のごみが置かれており、三角公園には沢山の野宿者の方が集まっている光景が広がっていた。同じエリアであるのにも関わらず、観光客で賑わっている場所とは対照的な状況に驚いた。また、三角公園からしばらく歩いたときにも、馴染みのあるコンビニエンスストアやチェーン店が見えた途端、急に治安が良くなったと感じた。このように、周囲の環境が治安を左右しているということからも、野宿者の排除を行うことは行政としては手っ取り早い方法なのだろう。しかし、このような基本的な人権が守られていないことは極めて問題であり、改めてマイノリティを排除し抑圧することの危険性を考えさせられた。

朝鮮学校に訪れた際、元気な声で挨拶をする子供たちの姿が印象的であった。もし私が小学生だったら恥ずかしがってしまい、そこまで簡単に自分から挨拶することはできなかつただろう。また、授業でも積極的に先生の質問に答えている様子が垣間見え、個々のアイデンティティを否定しない教育というものを肌身で感じる機会となった。正直以前は、在日朝鮮人と日本人が共生する未来を築くには、朝鮮学校ではなく日本の学校に通って小さい頃からともに成長する方が良いのではと思っていた。しかし長崎さんのお話を伺って、現実を見ると理想の姿にしか過ぎなく、在日朝鮮人に対する差別が根付いている環境がそれを由としないということを痛感した。そもそも、複雑な歴史があるとはいえ、当事者ではないこれからを生きる子供たちにその負担を負わせるのは不当であると思い、すべての子供が平等に教育を受けられる社会を目指す必要性を強く感じた。

この研修に参加したことで、社会に存在する壁は環境や周囲の影響によって形成されていること

を再認識した。野宿者問題や在日朝鮮人に対する差別も、周りの人の発言やメディアによって形成されたステレオタイプが一つの要因だ。私自身、これらの問題について学ぶ前は、周りから影響を受けたイメージを持っていた。そのうえで、自分の目で確かめたり、現状を知ったりすることがステレオタイプを減らしていくことに繋がると感じた。また、メディアを専攻する学生として、権力に対抗しうる手段としてのメディアと、切り取り方次第で人々を良いようにも悪いようにも扇動しうるメディアの二面性を理解し、私はマイノリティのような小さい声を伝えるという役割を今後将来を見据えたうえで大切にしていきたい。最後になりましたが、この度は非常に貴重な経験をありがとうございました。

## ●SCM 現場研修 感想

### 辻 豪士

今回、SCM 現場研修に参加してみて 1 番強く感じたことは、社会問題の現場は実際に行ってみなければ全容がつかめないということである。今回の研修では、日雇い労働者についてを釜ヶ崎で、在日朝鮮人についてを生野で見ることができた。研修に参加する前は、西成区には日雇い労働者が多く、センターで早朝から仕事を探す人も多いというイメージがなんとなくあった。生野の在日朝鮮人や、朝鮮学校の問題については、この研修に参加するまで知らなかった。

釜ヶ崎の日雇い労働者・野宿者については、定職に就いてもらい、住居を安定して確保してもらうことが最終目標かのように思っていた。しかし、日雇い労働を続け、野宿することで自分自身の力で生きていくことも、生きる上での選択肢であるということが今までにない考え方であった。行政の支援も、一方通行的な型にはまりきった支援では不十分であり、個々人の考えやバックグラウンドに即したものに变化していく必要があると感

じられた。

参加メンバーとの話し合いの中で出てきたアイデアで印象的だったのは「釜ヶ崎の中と外との間で、目には見えない境界線のようなものが存在する」ということであった。釜ヶ崎を歩いていると、コンビニ・ピザ屋などがある場所と無い場所がはっきりと分かれていることがわかった。このように、見えない境界線があることで、釜ヶ崎が世間の人々の視線から外れていき、関心を持ってもらえないという社会構造が見えてきたと思う。

また、生野の朝鮮学校については、補助金の有無について参加メンバーの中でも意見が分かれた。「他の外国語学校は補助金が出ているなら、朝鮮学校にも出すべきである」という意見があった一方で、「朝鮮に戻る・朝鮮語が生活で必須であるというわけでもないのに朝鮮学校に行くのは、私立学校に自らの意思で行くことと同じであるから、補助金全額支給とまではいかないのではないか」という意見もあった。これについて、私自身の意見を書くと、自らのルーツにまつわることを知ることは重要な権利であり、多文化共生や日本の国際的発展に向けては大きなチャンスであるから、補助金を出しても良いのではないかと考えている。しかし、正解は何かと問われるとハッキリとした答えは出せないとも感じた。

研修全体を通して、世間の人々の関心が釜ヶ崎や生野などの現場からは離れているということ、本来は困っている人を助けるべきである行政が、逆に困っている人々を追い払う立場になってしまっているという問題を知ることができた。人々の関心を現場に対して向けていくためには、1 人でも多くの人が現場で困っている人・活動している人の声を聞き、外に対して積極的な発信を行うことが必要であると感じられた。また、そのことによって、行政の姿勢を問い直していき、困っている人々を支援することができる社会を形成していくことができるのではないかと感じられた。最後に、今回の研修にご協力頂いた皆様に感謝し

たい。今後もこのような社会問題の現場には関心を持って生きていきたい。

## ●SCM現場研修感想

### 木下鈴菜

2 日間に渡るあいりん地区を含めた西成、そして朝鮮学校を主とした鶴橋地区に私は久々に訪れた。正直どちらの地区も子供の頃から私にとっては慣れ親しんだ場所ではあったため、これが普通と思って気に留めることは今まであまりしたことが無かった。まず、西成区について、ここは子供の頃から祖父や親と共に天王寺動物園に訪れたりはしており、両親はここはホームレスが多いのだと子供の頃から言われていた。特に隣接する天王寺には青空カラオケなどといったものもあるためここでもそのような類のものがあつたり日雇い労働者やホームレスも多いと勝手に考えていた。けれども、今回数年ぶりに足を運んでみると観光客へ向けたホテルなどで地域開発は盛んで街の雰囲気は少し変化したように思えた。1 番最初に感じた印象はこんなに綺麗だったっけ?である。その背景には数年前にはよく見られていたブルーシートなどで作られていた簡易的な小屋は解体させていたことを知った。これにはとても驚いた。そしてここに住んでいた人たちは現在どのように過ごしているのか疑問にも思った。行政は全ての国民に平等に暮らしを確保する必要があるが私にはあると考えているが、この一件で弱者を除け者扱いしていると感じ少し憤りを感じた。センターの封鎖はその地域で生活している彼らにとっては大きな打撃だったと簡単に考えられる。センターを封鎖してそれまで受けることができていた事柄を受けられなくなることも先ほどの事例と同様に彼らの生活に支障をきたしたと考えられる。行政はこの問題に関しては目先の利益を求めているが故に地域の人たちに寄り添うことを放棄しているのではないかと今回の研修で感じた。

鶴橋地区にいる在日コリアン(以下在日と略します)は私にとっては最も短い事柄である。私の父が生まれ育った場所だからだ。そして今回私は人生で初めて朝鮮学校をみんなと訪れた。これは私にとってとても貴重な体験になった。この地域に在日の人は多く在住している。しかし、近年では朝鮮学校を選択する人は少なくなっているのではないかと私は考えていた。その背景に私の父のように在日でありながらも日本で今後暮らして行くと決めている人は朝鮮の教育より日本の教育を選択するのではないかと思うからだ。実際、朝鮮学校の生徒数は減っていると聞いた。そしてこの学校には政府からの支援がないことを知った。最初私は政府の各学校への支援のあり方をあまり知らなかったため全ての学校に額は異なるがと思っていて。しかし実際には朝鮮学校はないと話を聞いた。その部分だけでは朝鮮学校だけ政治的に打ち切られたと聞こえるがインターナショナル系の学校も無いと調べたら出てきた。そして今回朝鮮学校を訪れた時、私はこの学校がとてもインターナショナルスクールのように思えた。政治的に差別されているのではなくこれは他よりも意識が高い学校なのだと感じてしまった。昔はそのような目的ではなく、あくまでも自国に帰ることを想定しての教育だったが今はそうではないのだと感じた。援助がないことは確かに学校の経営においてとても困難なことだとも容易に想像できる。朝鮮人だからと世間から厳しい目を向けられることもわかる。この学校は一人一人のアイデンティティを育てる場所だと話されていた。それはとても良いことだと思う。自分と似ている境遇の仲間を見つける良い場所である。これから日本を含め世界ではますますグローバル化になり多くの人と共存する。私たちはこのことを差別的に捉えるのではなく、どのような行動を起こせばこの事実を知ってもらえるかを考える必要があると感じた。

私はこの研修を忘れずに多くの物事をマイナス

面だけでは無くそれを違う角度で、またプラスの面だけでは無くどのように多くの人に知ってもらいさまざまな意見があることを引きずり出せるようにならなければならないと強く感じた2日間であった。

## ●SCM現場研修感想

北山直生

今回、SCM 現場研修に参加させていただき、多くの現場の生の「声」を聞くことができた。私がこの SCM 現場研修で最も大切にしていきたいと思っていた、現場の生の「声」。実際にその現地の「声」を聞くことは、多くの衝撃をもたらし、更なる学びや考えを深めるきっかけとなった。

正直、この研修に参加する前は生野や釜ヶ崎についてはもちろん、路上で生活する人々や在日朝鮮人の方々を取り巻く問題について知識がほとんどない状態であった。それぞれについて、ぼんやりとは知ってはいるものの、決して多くを語れるわけでもない。そんな中行われた2回の ZOOM 上での研修会。自分自身のその無知さを実感することとなった。見ること、聞くこと、初めてのことが多く、衝撃の連続であった。中でも、「在特会」の存在はとても考えさせるものとなった。今、現実で起こっている様々な問題。現場研修の前に、より関心が深まったように感じた。

そして迎えた現場研修、当日。そこでは、生の「声」、そして「肌」でより現場を感じる事ができた。まずは、釜ヶ崎での研修。実際に街を歩いてみると、テレビや YouTube で見たような街の景色が広がっていた。閉鎖された労働センターの周りには、ZOOM 研修での説明にもあった日雇労働の求人や実際に生活をしている様子を確認できた。そして三角公園の近辺には、昼間から多くの人が集まっており、楽しげな様子が見られた。その様子を見てみると、「路上」と「孤独」との関係性について考えることができた。生活保護を

受け、マンションやアパートの部屋の中で孤独死するより、路上で様々な人々と関わりを持ちながら生きていく方が良いのかもしれない、そのような考えも出てくる。今までは路上で生活するより、生活保護を受給し部屋の中で生活する方が絶対に良いだろうと決めつけていた。しかし、それも一概には言えない。今、路上で生活する人々にとって本当も幸せとは何なのであるか。根本から考えが大きく変わっていった。

そして次に行なった生野での研修。初めて訪問した朝鮮学校で聞いた多くの話は衝撃の連続であった。実際に学校の中を案内していただき、生徒たちの様子を見学させていただいた。その様子は、私自身が通っていた小学校とは何も変わらないものであった。もちろん多少、カリキュラムなどは異なるが、掃除の様子や授業風景は私が知っている「学校」そのものである。しかしそのような中で、朝鮮学校は行政からまともな支援がされていないという現状を知ることが出来た。保健室やプールなど、普通「学校」にあるべきはずのものがない。学校として生徒に必要なものを十二分に与えることが出来ない。このような朝鮮学校の現状に考えさせられた。

今回、この SCM 現場研修での経験を通して、多くの現実を生の「声」を通して知ることができた。いつも私たちが当たり前のようにしていることが「当たり前」ではない人たちがいる。この現実には必ず目を向けていかなければならない。そして何より、この現実を私たちの世代が伝えていかなければならない。メディアを通さない、決して「画面越し」ではない目で確認した現実。この経験を活かし、これからこの世界にありふれる社会問題を捉えていかなければならないだろう。

## ●SCM現場研修2024を受講して

大阪 YMCA 吉岡 祐理

今回、SCM 現場研修を下記の概要で受講した。

## 【研修内容】

2月26日：午後1時半～4時半 ZOOM<釜ヶ崎>

講演①生田武志「夜回りと生活困窮の現場から」

講演②大谷隆夫「釜ヶ崎のセンター問題について」

2月28日：午後1時半～4時半 ZOOM<生野>

講演③呉光現「在日コリアンの基本的人権」

講演④長崎由美子「朝鮮学校差別から見えるもの」

3月1日～2日：午前10時～翌午前11時

釜ヶ崎フィールドワーク・井上さんよりお話

生野フィールドワーク・大阪朝鮮初級学校見学

## 【感想】

今回、SCM 現場研修に参加した理由は、自分が生活している日本・大阪の貧困やマイノリティーを知らないことに気づき、これから様々な人々と関わる上で理解しておきたいと思ったことだった。今回は釜ヶ崎で野宿や日雇い労働をしている者についてと生野で生活する在日朝鮮人について学ぶ時間が得られた。

釜ヶ崎と生野について事前の ZOOM 研修で現状や歴史を知った上で、現場を見ることができた。だからこそ、多くの気づきを得られた。

まず、貧困や差別を受けながら生活するなかで、そこに暮らす人々に笑顔があったことに気付かされた。今まで私が育ってきた中で知らず知らずのうちに染み付いていたレッテルや、事前学習から、彼らは生きることが大変でひどい扱いや言葉をかけられているというイメージが強かったし、差別を受けて可哀想という部分に注目してしまっていた。しかし、現場をみて、彼らにも仲間がいて、彼らの日常があり、支え合う仲間がいて、笑顔があった。今回の研修の参加者の感想で「笑いあっている人たちがいた」「子供達の素敵な笑顔を守りたい」という声もあり、ここに注目したのは私だけではないと感じる。生きること直結する苦労が多い＝不幸で笑顔のない暮らしをしている。ではないことが初歩的ではあるが自分たちの認識

はこのレベルから変えていく必要があると気づくことができた。

次に、多くの対立があることを知った。釜ヶ崎でいうと、生活保護を受けたくない生活者と生活保護を受けさせたい行政。日雇い労働者が生きるために集まる釜ヶ崎地域と釜ヶ崎の立地を活用するために活性化させたい行政。薬の売買や治安維持のための監視カメラ増設設置と住民のプライバシー侵害となる台数や向き。生野でいうと、自分たちの選択で楽しく通う朝鮮学校生と「朝鮮」だからだったり、不平等に晒されていると必要以上に騒ぐ周りの人たち。これらの対立は長い歴史や裁判など、私が知識を得た数日の数時間でも多くのことが複雑に関係していたので、簡単に判断して言うてはいけなかったと感じた。その上で、私たちがこれからできることは、本当の意味での寄り添い方を考えることだと思った。変化や改善は誰かのためにしてあげるのかもしれない。しかし、本人が望んでいなかったり、声をあげることによって影で苦しむ人がいることもあると思う。望まれている行動は、偽善であり、手助けした人の自己満足と言われる。声をあげることによって注目が集まり、守りたい彼らの今の暮らしを奪うことも十分に理解しないといけない。

この SCM 現場研修を受講して現場を見ることが大切さを身にしみて感じた。まだ私の中でレッテルがぬぐいきれていないことを理解しつつ、今回学んだことを伝え広められるように、現状を知り続ける努力も続けたいと思う。

この歴史ある現場研修に14名の仲間とともに参加できたことに感謝申し上げます。

## ●● スタッフ感想

### ● SCM 現場研修 2024 感想

石村 愛子

今年も昨年に引き続き、スタッフとして現場研修に参加させていただきました。釜ヶ崎・生野を訪れるのは2回目で、さらに今年は大阪に1泊することができ、皆でご飯を食べたり、わかちあいの時間を多く取ったりと、大変充実した研修になりました。

昨年初めて訪れた時は、自分が関東に住んでいるため、見るものなにもかもが初めてで、とても新鮮に感じられました。今年また訪れてみると、昨年とはまた違った多くの発見や気づきを得ることができたように思いました。また、研修生のわかちあいの話を聞くなかで、様々な物の見方や考え方に触れたことで、とても大きな学びを得ることができたように思います。

釜ヶ崎においては、私が初めて現場研修に研修生として参加した時から、路上生活者の人々をとりまく環境は全く変わっておらず、むしろますます居場所を失われるような状況に置かれていることに心が痛み、また様々なことを考えさせられました。前述したとおり私は関東に住んでいるため、釜ヶ崎を頻繁に訪れることはできませんが、路上での生活を余儀なくされている人は関東にももちろん沢山います。現場研修に参加しながらも、日常の中で忙しさを理由にほとんどかかわりを持ってこなかったことを反省し、今後普通の生活の中で、私はこれからどのようなかかわりをするができるだろうかと深く考えさせられました。

また生野においては、昨年訪れた学校が閉校し、合併した新しい朝鮮学校を訪れましたが、昨年も私たちを出迎えてくれた校長先生にもまたお会いでき、嬉しい気持ちになりました。朝鮮学校に通う子供たちは私たちを非常に歓迎してくれました。在日コリアンの人たちは、日本人に対する反感など全くないにも関わらず、メディアなどによって一方的に歪んだイメージを流され、多くの人々がそれを鵜呑みにしてしまっている現実をとても悲しく思いました。一方で、生野のコリアンタウンは現在の K-POP ブームから多くの若い人でごっ

たがえして、なんだか複雑な気持ちにもなりました。日本と朝鮮半島は非常に重く、複雑な歴史を抱えています。しかし、偏見や間違った考えにとらわれることなく、正しい歴史認識に基づいた上で、すべての人の人権や人格を尊重するような関係性を築いていくことが非常に大切であると痛感しました。また、そのために、私は普段からどんなことができるだろうか、とも考えさせられました。

最初に書いたように、二回目に大阪を訪れるからこそ見えてきたものが沢山ありました。やはり、「実際に現場に行く」ということは、とても大きなものをもたらしてくれると、非常に感じました。今回の経験からの学びで得たことを大事にして、日々の生活の中で自分や社会を見つめつづけていけたらと思っています。今年もスタッフとして参加させていただきましてありがとうございます。また、講師の皆様、他のスタッフの皆様、そして研修生の皆様、大変お世話になりましたありがとうございます。

## ●2024 SCM 現場研修の感想

釜ヶ崎現場スタッフ 大谷隆夫

新型コロナウイルスの感染もほぼ収まった中で、2024年のSCM現場研修が行われたが、今回の現場研修は、従来のSCM現場研修により近くなった現場研修であったと思う。

それでは、来年からは、従来通りの現場研修が行えるのかということであるが、問題はそう単純ではないと思う。

「生野」、「釜ヶ崎」を現場として始められた、SCM現場研修であるが、2024年で46回目（46年目）を数えるに至っている。ところで、私達が、課題として担わなければならない問題は、例えば、「気候正義の問題」や「性的少数者の問題」、さらには「非正規の移住労働者の問題」等、46年前と比べて、ずいぶんと多様化して来ている

ると思う。

そういった中で、これからも「釜ヶ崎」、「生野」にこだわって現場研修を続けていくのか、それとも、「釜ヶ崎」、「生野」という現場だけにこだわらず、新しいテーマも新たに加えながら、現場研修を続けていくのかということ等も、ぼつぼつ考える時期に来ているのではないかということ、今回も、現場研修を手伝わせていただく中で、改めて考えさせられている。

今回もそうであったが、ここ数年は、「釜ヶ崎のセンター問題」というテーマで、SCM 現場研修で講演を続けているが、この「釜ヶ崎のセンタ

ー問題」とは、言葉を変えて言うと、今まで、釜ヶ崎を特徴づけていた、「貧困」の問題が、これからはそうではなくなって、より見えにくくなるということでもある。そういったより見えにくくなった「貧困」の問題が、よりリアルに感じられるためには、まずは「貧困」というテーマに重点を置いて、研修を行うというのも一つの方法ではないかと思う。

「貧困」と言うか、「貧困の見えない化」の問題を若い人達にどう伝えていくのかということが、これからの SCM 現場研修に課せられた大きな課題であると改めて思う。



---

SCM現場研修2024（第46回）感想文集

---

2024年12月15日発行

編集・発行 SCM協力委員会  
委員長・鈴木一弘、主事・飛田雄一

〒657-0051 神戸市灘区八幡町 4-9-22  
神戸学生青年センター内  
TEL 078-891-3018 FAX 078-891-3019  
ホームページ <https://ksyc.jp/scm/>  
e-mail [hida@ksyc.jp](mailto:hida@ksyc.jp)

---